

ケンブリッジ・プラトン学派の祖 ベンジャミン・ウィッチコット ——そのプラトニズムとキリスト理解——

三 上 章

キーワード：ウィッチコット、ケンブリッジ・プラトン学派、プラトニズム、キリスト
Whichcote, The Cambridge Platonists, Platonism, Christ

1 序

この論文は、ケンブリッジ・プラトン学派の祖と言われるベンジャミン・ウィッチコットのプラトニズムが、そのキリスト理解にどのように作用しているのか、という問題を解明しようとするものである。

政治紛争と神学論争が激しく錯綜した17世紀イングランドの内戦時代(1642-65)と重なる1633年から1688年にかけて、ケンブリッジ大学において古典文献、特にプラトニズム関連文献を学び、学寮チャペルでの説教に従事した一連の哲学的神学者、または神学的哲学者が存在した。そのなかに数えられるのは、ベンジャミン・ウィッチコット(Benjamin Whichcote, 1609-83)、ラルフ・カドワース(Ralph Cudworth, 1617-85)、ヘンリー・モア(Henry More, 1614-87)、ナサニエル・カルヴァウエル(Nathaniel Culverwel, 1618?-1651)、ジョン・スミス(John Smith, 1618-52)、ピーター・ステリー(Peter Sterry, 1613-72)の6名である¹⁾。彼らに共通すると見られるプラトニズム的思考の型のゆえに、現在、研究者たちによって「ケンブリッジ・プラトニスト」(The Cambridge Platonists. のち[CP]と略称)と呼び慣わされている。この呼称の他に、彼らのごく早い時期から「広教の人たち」(Latitude-Men)、あるいは「広教主義者」(Latitudinarians)とも呼ばれていたが、これらはすべて、彼らの哲学的な広いものの見方に反対するキリスト教保守派の側が付けたレッテルである²⁾。なお日本語では通常「ケンブリッジ・プラトン学派³⁾」という訳が用いられるが、「学派」といっても、必ずしも彼らが強くそのように意識したということではない。しかし、彼らにはゆるやかではあるが、思想上の連続性があることも事実である。彼らは、クライスツ学寮(Christ's College)で学んだヘンリー・モア以外全員が、ピューリタ

ンの牙城、エマニュエル学寮 (Emmanuel College) でプラトン、アリストテレス、およびキケロー、プロティノス、オリゲネスらを、さらにはデカルトやホッブスらを読み、思索を養った学徒たちである。

本論文の研究対象は、CPの祖ともいべきウィッチコットのキリスト理解であるが、その研究に入る前に、CPの思想の特徴を概観しておきたい。ポーヴィック (F. J. Powicke) は、CPに共通する精神の特色として以下の諸点を挙げる。①いわゆるキリスト教プラトニストであった。プラトンやプロティノスをこよなく愛し、聖書をこよなく尊重した。②プラトンに従い、「主のともしび」(『箴言』20, 27) としての理性の重要性を強調した。③宗教の真理がその他の領域の真理と一致することを信じた。そこから聖書の啓示は「自然の光」と一致し、神の恵みは人間の善行と一致するという理解が生まれ、そのような理解はピューリタン・カルヴィニズム (Puritan Calvinism.⁴⁾ のち [PC] と略す) の見直しにつながっていった。しかし、実際のところ、彼らは他の宗教や思想に理解と寛容をもつことができる人たちであり、理性と「内なる光」への畏敬に基づき、内面の浄化と、そこから生まれる善行の大切さを説いた⁵⁾。

クラッグ (G. Cragg) は、CPの基本的教説として以下の諸点を挙げる。①理性と信仰は一致する。②理性は心の内面を照らすものであるから、理性の探求は必然的に善行につながる。③信仰と理性の統合、神学と倫理学の統合を重視する考えは、良心の自由、および宗教的寛容の立場に運動する。④ホッブスが唱えた物質主義的世界観、および決定論に反対し、霊的なものの実在と意志の自由の論証に努めた。⑤神学論争の紛糾する時代にあつて、不毛な神学論争を避け、宗教の根底にある真実で普遍的なものを追求し、キリストのいのちを生きることを強調した⁶⁾。古今の文献を不偏広範に学習する中で、自らの宗教の土壌であるPCを批判的に吟味するようになり、予定説を否定するに至った⁷⁾。

ターリアフェロー (C. Taliaferro) とテプリー (A. J. Teply) は、CPの精神の特色として以下の諸点を挙げる。①プラトンに従い、善、真、美を根本的に重要なものと考え、それらの統合と調和を理想とした。②諸セクトのなかで勢いのあつた反知性主義の傾向に対して、探求は善であると考えた。理性は神の贈りものであり、啓示と調和して働くと考えた。③神と人間の魂との関係を大いに親密なものにとらえ、魂が神との親密な交わりの中で、ますます神の生命に与ることを求めた。④内戦の悲惨な現実にもかかわらず、被造物は善であり、神の賜物であると考えた。⑤知性と神秘、神の主権と人間の自由、肉体と魂、神の超越と内在、よい業と神の恵み、内なるいのちと社会的責任、との間の統合を追求した⁸⁾。

パトリデス (C. A. Patrides) によると、CPの系譜は、プラトン哲学を独自の仕方で開催したプロティノス、ポルピュリオス、イアンブリコスら新プラトン主義者に連なる。その点では、マルシリオ・フィチーノやピーコ・デッラ・ミランドラたちのフィレンツェの新ブ

ラトン主義者に類似している。しかし、プラトンよりも頻繁にプロティノスを引用し、プロティノスよりも頻繁に小さな新プラトン主義者たちを引用する点に、CPの独自性がある。彼らは新プラトン主義を歓迎はしたが、それは無批判な受容ではなかった。神学の面では、一方においてオリゲネスを筆頭とするギリシャ教父たちを重用し、他方において西方教父たちをあまり使用しない傾向がある。だが、アンセルムスとトマス・アクィナスは尊重された⁹⁾。

カッシーラーが鋭く洞察したように、CPのプラトニズムは、プラトン思想の直接的継承でもなく、単なる再受容でもない。それはマルシリオ・フィチーノとフィレンツェ・アカデミアによって描かれたプラトン思想の画像と重なり合っている¹⁰⁾。彼らにとってプラトンは、真の哲学と真のキリスト教との協働を示す証人であった。そのプラトニズムは自説を権威づけるための装飾品ではなく、真理探究そのものであったといえるであろう。

2 ベンジャミン・ウィッチコット

通常、CPの始祖と見なされる人物はベンジャミン・ウィッチコットであり、「その運動のソクラテス」(the Socrates of the movement)とも呼ばれた¹¹⁾。彼は1609年、イギリス西部の地方地主の家に生まれた¹²⁾。1626年、17歳でエマニュエル学寮に入学し、文学士と文学修士を取得後、同学寮のフェローに選ばれた。1634年、25歳で学寮のチューターに就任し、1636年、執事職と司祭職に同時に叙任された。1643年、ケンブリッジ大学からサマセットシャーのノース・カドベリーに聖職者録を与えられたが、彼がロンドンの富裕な商人クラドックの未亡人レベッカと結婚したのは、この年であると考えられる。1645年、ケンブリッジに呼び戻され、キングズ学寮長に就任し、8年間奉職した。1649年からは、ケンブリッジ大学の副総長を兼務した。

副総長2期目の1651年、ウィッチコットは、エマニュエル学寮時代の旧師であり現行のエマニュエル学寮長であるタックニー(Anthony Tuckney, 1599-1670)から手紙による質問状を受け取った。それは、PCの立場を代表するタックニーから、ウィッチコットのプラトニズムの傾向に対して投げかけられた批判である。ウィッチコットは丁寧な返答を送り、その後も2人の間に意見が取り交わされた。この期間も彼は、トリニティー学寮チャペルで日曜午後の聖書講解を続けた。その後、1660年、51歳の時、ウィッチコットは大きな波瀾に遭遇した。王政復古のあおりを受け学寮長・副総長職を剥奪され、ケンブリッジシャーのミルトンの司祭館への隠遁をよぎなくされた。しかし、2年後の1662年、宮廷の愛顧を回復し、ブラックフライアーズの聖アンズ教会の「司祭職」(cure)に任ぜられることになり、ミルトンからロンドンに移った。ところが、4年後の1666年、ロンドン大火によりその教会が焼失したため、しばらくミルトンに戻り隠遁に近い生活をした。しかし

1668年、チェスター主教に昇進した旧友ウィルキンズの助力により、約60歳のウィッチコットは、ロンドンのジュアリーにある聖ローレンス教会の「教区司祭職」(vicarage)を受領することになり、以後この教会で13年あまり毎週2回の説教を行った。1683年5月、ウィッチコットは、弟子であり同志である、クライスツ学寮長のカドワースをケンブリッジに訪ねた折、風邪をこじらせ、カドワースの家で息を引き取った。享年74歳であった。

2.1 ウィッチコットと説教

ウィッチコットは、自分が専門の研究者であるという認識をもっていなかった¹³⁾。本を一冊も書かず、むしろ若者の教育と教会での説教に精魂を傾けた。彼の天職は説教であった。当時、説教はイングランド社会における最も効果的な大量伝達手段であった。説教は単に宗教の話にとどまらず、社会全体の動きを反映した。それゆえ、人々は何にもまして説教を聞くため、こぞって教会や学寮チャペルに集まった¹⁴⁾。1636年、聖職者に叙任された後、ウィッチコットは26歳で、ケンブリッジ大学の中でも名高いトリニティー学寮チャペル(トリニティー教会)の日曜午後の聖書講解者に任命された。以後、その聖書講解は約20年にわたり続けられた¹⁵⁾。この期間は、イングランド革命の動乱がその頂点に達した時期と重なる。ウィッチコットが学寮チャペルで語った聖書講解は、当時流行していた熱狂と無思慮の説教とは異なり、健全な判断と洞察に富んでいた。その人柄と明快な聖書講解は、多くの学生や教師を惹きつけた。学寮チャペルの礼拝には学外の人も出席することができたので、トリニティー教会には学外からも心ある人たちが大勢出席した。世の中が大きく変動しつつあった時期であり、ウィッチコットは聴くに価する説教者であったから、人々は彼の聖書講解を傾聴し、その中に自らの行動の指針を発見しようと努めた。その結果、彼の影響は大学内にとどまらず、地域社会にも及んだ¹⁶⁾。

ウィッチコットは生涯において、少なくとも2000回の聖書講解を行ったと推定される。現存するものはすべて速記から起こされたものであり、ごく一部分とはいえ98篇にも及ぶ。それらは*The Works of the Learned Benjamin Whichcote, D. D. Rector of St. Lawrence Jewry*, London, 4 vols (Aberdeen, 1751)に収録されている。また、ウィッチコットは聖書講解のための『覚書』を残しており、その数は6000にも及ぶ。それらのうち、1200篇が*Moral and Religious Aphorisms by Benjamin Whichcote, D. D.* (London, 1930)として、1753年に刊行されている。なお、先に少し触れたように、ウィッチコットは、タックニーから届いた質問の手紙がきっかけとなって、神学上の議論を交わすことをよぎなくされた。両者の手紙が4通ずつ合計8通が残っており、それらはウィッチコットの思想を知る上で重要な資料である。PCの立場を代表するタックニーには、ウィッチコットのプラトニズムを臭わせる聖書講解はあまりにも自由すぎるように思われ、いたたまれ

なくなって質問状という形で手紙を送った。そこからそれぞれの理解の違いをめぐり、議論が展開されていった。これらの手紙は、T. E. Jones, [Ed.] *The Cambridge Platonists. A Brief Introduction* (University Press of America, 2005) の中に収録されている¹⁷⁾。

ウィッチコットがどの程度プラトニストであったかということは、これから先の課題であるとして、彼がある程度プラトニズムの思想に通じており、それを学生たちにも教えたことは確かである。彼と同時代に生きたバーネット (Gilbert Burnet, 1643–1715) によると、ウィッチコットは学生たちが柔軟な思考力を養うことができるようにという配慮から、彼らにプラトン、キケロー、プロティノスといった古代の哲学者を読むように強く指導した¹⁸⁾。また、タックニーによると、ウィッチコットは非常に早い時期から「哲学と形而上学」の研究を、特に「プラトンとその学徒たち」の研究を開始していた¹⁹⁾。他でもなくウィッチコット自身も、プラトニズムの思想の価値を認めている。

In some Philosophers especially Plato and his scholars I must need acknowledge from the little insight I have ... I find many excellent and divine expressions.

私がつもっているいくばくかの識見は、まぎれもなく何人かの哲学者たち、特にプラトンとその学徒たちに負うものであることを認めます。……そこには、多くの優れた神的な表現が見いだされます²⁰⁾。

2.2 本論文の目的

ウィッチコットの思想は、さまざまな見地から批判することが可能である。タックニーのようなPCの見地からは、それは正統派カルヴィニズムを希釈するものと思われた。ブラウン (J. Brown) は、ウィッチコットの聖書講解は象牙の塔のそれであり、失敗だったという判断を下すが²¹⁾、宗教思想の価値を大衆化の度合いによって計る見地からはそういう批判も成り立つであろう。パスモア (J. A. Passmore) はウィッチコットとカドワースの思想上の関係について、次のような見解を述べる。「ウィッチコットについていえば、彼は専門的な意味では決して哲学者ではなかった。カドワースは宗教・道徳観についてはウィッチコットから甚大な影響を受けたが、それ以外には彼からほとんど何も学ばなかった」という見解を示す²²⁾。哲学大系の影響という見地からは、そのような判断も成り立つであろう。他方、ダヴェンポート (P. M. Davenport) は、イングランドの教会において他者への攻撃が蔓延するなか、ウィッチコットは「新しいキリスト像、すなわち、常識に叶う道徳性を備えた柔和で穏やかなキリスト」を伝えたという評価を下している²³⁾。それはそうであるが、われわ

れとしてはただそれだけなのかと問わざるをえない。

以上の研究者たちの見解とは対照的に、カッシーラー (Ernst Cassirer) は、「ケンブリッジ学派の仕事がさまざまな角度から解明されはしたものの、この学派がかかげていた本来の精神的原理はまだ把握されるには至っていない」という重要な指摘を行い²⁴⁾、以下のような見通しを示している。

この学派の思想家は「啓蒙」の唱道者たちからは宗教的反動主義者とみなされたとすれば、ピューリタンの論客からは宗教的無関心者と思われた。両者はともに、「広教主義」信仰の広さによって開かれるはずの、新たな深さを見きわめることができなかった。事実、ケンブリッジの思想家があらゆる著作で問題としたのは、たんに宗教上の地平を広げるのではなく、信仰心を新たな基層へ、別の次元へ深化させることであった²⁵⁾。

ウィッチコットのキリスト理解のなかに、「新たな深さ」があるのではないかということが、本論文の仮説である。

3 私たちの内なるキリスト

先に述べたように²⁶⁾、ウィッチコットは聖書講解の準備として、多くの『覚書』をしたためたが、そのなかに彼のキリスト理解を端的に示すと思われる文言がある。

We partake of the *Death* of Christ; by passing into the *Spirit* of Christ. The great work of Christ in *Us* lies, in implanting his own *Life* [Lively Nature] in the lapsed degenerate Souls of Men. Christ is not to be as in Notion or History; but as a Principle, a Vital Influence.

私たちがキリストの死に与るのは、キリストの霊の中に移行することによってである。私たちの内なるキリストの偉大な働きは、彼自身のいのち [生氣ある本性] を、人間たちの墮落腐敗した魂の中に移植することにある。キリストは、観念のなかに、あるいは歴史のなかにあるものとしてではなく、原理、生ける影響力として存在しなければならない²⁷⁾。

ここに、人間を救うのはその内にあるキリストであり、人間の外にあるキリストではないという考えが表明されている。大事なものはキリストの肉体ではなく「霊」である。「彼自身のいのち [生氣ある本性]」である。キリストは観念や事象なのではなく、むしろ「原理、生

ける影響力」なのである。このような「内なるキリスト」理解は、「内住のキリスト」を説いたパウロ²⁸⁾ や、「いのち」「ロゴス」「霊」「生ける水」としてキリストを提示した『ヨハネによる福音書』²⁹⁾ の系譜に連なるとみることができよう³⁰⁾。ウィッチコットの霊的なキリスト理解は、キリストの歴史的事実性と抵触しかねないように思われるかもしれない。しかし、彼はキリストの歴史的事実性には疑いをはさまず、むしろそれを神学的思索の前提としている。そのことは以下のことばからうかがわれるであろう。

Christ did, 1. what the divine Will and Pleasure thought fit; 2. what Reason and Equity called-for; 3. what was worthy and valuable too, in it's self; 4. what was useful and tending to noble purposes; 5. what was available and effectual, in respect of issue; 6. what was pleasing and acceptable to God.

キリストは次のことを行った。①神がその意志と欲求において適正だと考えること、②理性と公正が要求すること、③それ自体において価値があり貴重であること、④有用であり高貴な目的に向かっていくこと、⑤問題に関して利用可能で効果があること、⑥神に喜ばれ受け入れられること³¹⁾。

ウィッチコットにとってキリストの歴史的事実は当然のことであるが、もっと大事なことはその本質であり、それが人間の内なるキリストなのである。この内なるキリストは「私たちの内なるいのち」である。つまり、「キリストは名前や観念だけの小さなものではない。キリストは本性であり、霊であり、私たちの内なるいのちである」³²⁾。「主のともしび」なる「人間の霊」としての理性は、内なるキリストによって照らされることによって、始めて人間を照らすことができる。換言すると、内なるキリストは「私たちの内なる神の霊」ということになる。

The *Spirit of God* in us, is a Living *Law*, Informing the Soul; not Constrained by a Law, without, that enlivens not; but we act in the Power of an *inward Principle* of Life, which enables, inclines, facilitates, determines. Our *Nature* is reconciled to the Law of Heaven, the Rule of Everlasting Righteousness, Goodness, and Truth.

私たちの内なる神の霊は生ける律法であり、魂に活気を吹き込む。それは、生かすことをしない外なる律法によって束縛されない。私たちが行動するのは、力づけ、欲しきせ、促進し、決定するいのちある内なる原理の力によってである。私たちの本性は、天国の

律法と、永遠の正義、善性、真理の規則と合致する³³⁾。

私たちの内なる神の霊は、人間の魂に活気を吹き込み、自発的な判断と行動へ向かう力を与える。それゆえ「内なるいのちの原理」と呼ばれる。ウィッチコットにとって、内なるキリストは静的な存在ではない。それは「私たちの中に形成されるキリスト」であり、不断の運動、変化、成長を行う動的な存在である³⁴⁾。

ここで言及されている人間とは、家柄や学歴によらない、すべての人間である。王侯・貴族や富裕な商人だけではなく、一般民衆も含まれる。ウィリー (B. Willey) は、ウィッチコットに始まる CP のプラトニズムを次のように評価している。

宗教と政治が複雑に交差して生じた混乱の状況において、ウィッチコットとその流れを汲む人たちは、時代、民族、教派を超えた、全人類に共通する原理を探求した。そして、彼らはプラトニズムにそれを見出した。彼らにとってそれは、キリスト教と同じ価値観、宗教精神を示すものであった。当時、茨の茂る狭い道になっていたキリスト教の道よりも、彼らはプラトニズムの公道を歩むことに、混乱を打開する活路を見出そうとしたのである³⁵⁾。

ウィッチコットの内なるキリストという見方にも、おそらくプラトニズムに基づく普遍的原理への希求が反映されていると見ることができよう。ウィッチコットにみられる霊的解釈の傾向は、PC の立場に立つタックニーにとっては不快なものであった。彼はウィッチコットの説教のなかに「自然神学」(Theologiae Naturalis) の臭いをかぎつけ、その「理性」(ratio) を「最高の裁判官」(summus iudex) とする考え方に危機感を覚えた³⁶⁾。神の啓示と聖書を究極の基準とみなす観点からは、ウィッチコットの考え方は「ソキヌス主義やアルミニウス主義の輩」の異端につながりかねないものであった³⁷⁾。ウィッチコットが若い頃から、「プラトンやアリストテレスの哲学」(Philosophy and Metaphysics) の研究に没頭していたことを知るタックニーは、哲学がウィッチコットの説教の力を弱め、分かりにくいものにしてしていると忠告した³⁸⁾。しかしながら、実際には、ウィッチコットの説教は概して哲学色が薄く、哲学者や哲学概念の引用も最小限に抑えられている。たとえば、プロティノスを例にとるなら、ウィッチコットがあからさまにプロティノスに言及するのは、1 回だけである³⁹⁾。それにもかかわらず、タックニーはウィッチコットの言説のところどころに、プロテスタント正統主義とは異質な何かを感じ取ったのである。その何かとは、プラトニズム的思考傾向のことではないかと思われる。ウィッチコットは哲学史の意味におけるプラトニズム哲学者ではない。彼の説教は、基本的にプラトニズムの概念ではなく、パウロ

やヨハネの教説に立脚している。しかし、「広義のプラトニズム⁴⁰⁾」が彼の思考法に底流していることは、否定できないであろう。

4 キリストの人性と人間の「神化」

ウィッチコットのプラトニズム的思考傾向は、そのキリスト理解における人性の強調に表れているように思われる。「さあ、よくご覧ください。人性に付与された偉大な名誉を」(observe here, the great honour put upon human nature)⁴¹⁾。キリストは、被造物としての限界をもつ人間のようになった。それゆえ、「情念、感情、および感覚」をもつが、人間とは違い、それらは理性によって完全に統御されている。もちろん、キリストは人間の罪には与らなかった⁴²⁾。キリストが来たのは肉に「おいて」(in) ではあるが、肉に「従って」(after) ではない⁴³⁾。

キリストの人性について重要な点は、それが神による人間性の肯定を意味するという点である。その肯定は、社会における下層民をも含むすべての人間の尊重を意味する⁴⁴⁾。実際、ウィッチコットは聖書講解において、社会のなかのいかなる人をも軽視してはならないと語り、人間愛、丁寧さ、優しさをもってすべての人に接し、貧しい人にも耳をかさねばならないと語った。他者への尊敬は人間以外の動物にも及ぶ。ウィッチコットは、馬や犬を愛護せよと説いた⁴⁵⁾。以下の言葉は、キリストが人性に与ることが、身分差別に及ぼす意味合いを示している。

And this may satisfy those that are in the meanest offices and employments; that there is nothing base, that hath place in God's creation.

このことは、最も卑しい職務や職業に就いている人たちを満足させるでしょう。神の創造の中にその場所をもつもののなかに、卑しいものなど一つもありません⁴⁶⁾。

イングランドの貧民は、貧困と低い身分のゆえに卑しめられ、無知で悪者であると嫌悪されていた。しかし、ウィッチコットによると、それは間違いである。社会の中のいかなる人をも、軽蔑したり、見下げたりしてはならない⁴⁷⁾。その根拠が、キリストが人性に与っているということなのである。

キリストが人性に与るとは、神としてのキリストが神であるまま人性に与ることを意味するが、ひるがえって人間の側からは、神性に与る可能性が開かれたことを意味する。ロゴスが人間となったのは、人間がロゴスとなるためなのである⁴⁸⁾。ウィッチコットは『覚書』のなかで、以下のように記している。

Religion is, τὴς ὁμοίωσις Θεοῦ, κατὰ τὸ δυνατόν ἀνθρώπου the being as much like God as Man can be like him.

宗教とは、人間にとって、できるかぎりある意味で神に似るようになることである⁴⁹⁾。

「ある意味で神に似るようになること」(τὴς ὁμοίωσις Θεοῦ) という文言は、プラトンの「神に似ること」(ὁμοίωσις θεῶ) という思想を想起させる。プラトンにとって神に似ることとは、思慮ある人間になること、人と神に対して正しい者になることであった⁵⁰⁾。人は正しく生きる努力なくして、神に似ることは不可能なのである⁵¹⁾。ウィッチコットは、この考え方を好んでいたようである。この考え方は、プラトンからプロティノスにおける神との合一の思想の中に流れて行き、その後、東方のギリシャ教父、フィレンツェのプラトニストたち、そして CP にも到達した⁵²⁾。ウィッチコットは専門の哲学者ではないので、「神に似ること」を哲学思想として展開することには関心がない。ただ、それがキリスト理解に有用であるかぎりにおいて、大事なのである。彼は「神に似た」(God-like) という表現も使用する。「神に似た」とは、聖霊の実、すなわち「正義、善意、真実」(『エフェソの信徒への手紙』5章9節) が、私たちの内に実ることである。それは倫理的行動に現れるものであり、死せる宗教的概念ではない⁵³⁾。

ウィッチコットが古代や中世の哲学者から多くのものを吸収し、それらが彼の思索を養ったとしても、聖書講解におけるその基本姿勢は、聖書に典拠を求めるということであった。彼は、「神に倣う」(imitate God) ことの大事さに関連して、セネカを引用した直後、次のように述べる。

Seneca saith, “If a man would be holy and righteous, let him *imitate God*; and if a man do partake of God he is such and will be such.” But why should I quote the philosopher, since the apostle saith, *we partake of the divine nature*, by a principle of holiness and righteousness, 2 Pet. ii. 4.

セネカは言う。「人は聖く正しい者になりたいなら、神に倣うべきである。そして、人が神に与るなら、現に聖く正しい者であるし、これからもそのようであろう」。しかし、なぜ私は哲学者を引用すべきでしょうか？ というのは、使徒は、聖と正義の原理により私たちは神の性質に与ると言うからです。『ペトロの手紙二』2章4節⁵⁴⁾。

ウィッチコットはギリシャ哲学の伝統に敬意を払うが、それよりも聖書を上位に置く。彼の使命は、あくまでも聖書の教師であり、哲学の教師ではない。とはいえ、彼は、いかにして伝統的なキリスト教概念を、同時代の人たちに適切なものとして提示するかという課題を強く自覚しており、問題解決の原理をプラトニズムの中に見出したことはまちがいない。それは、彼の聖書講解において、聖書および伝統的神学概念を説明する場合に、ときにはプラトニズムの概念が使用されるというかたちで表れる。たとえば、ウィッチコットは、「神化」(deification)、「分有」(participation)⁵⁵⁾、「模倣」(imitation)といった概念を使用する⁵⁶⁾。実際のところ、哲学者への言及回数としては、プラトンよりもアリストテレスのほうが多いが、けっしてそれはアリストテレスに基づくスコラ哲学の優位を意味しない。ウィッチコットは、アリストテレスを“the Philosopher”あるいは“the great Philosopher”と呼んで尊敬を示してはいる。しかし、それは、アリストテレスの道徳哲学が、プラトン哲学の発展形態として評価されているかぎりにおいてであると思われる⁵⁷⁾。ウィッチコットにとって、キケローも正しい聖書理解に有用な助けであり、「キケローは……キリスト者と称するけれども理性を否定すると思われる人たちよりも、すぐれた神学者です」(Tully ... who is a better *divine* than some who pretend to be christians, and yet seem to deny reason)⁵⁸⁾ という評価を示している。2世紀に活躍したアレクサンドリアの教父たちは、キリスト教を既成のギリシャ哲学に接ぎ木しようとした。これに対して、ウィッチコットに始まるCPは、ギリシャ哲学を既成のキリスト教に接ぎ木しようとした。その点では、アレクサンドリア学派とCPとは対称関係にあると言えるであろう⁵⁹⁾。

先に述べたように、ウィッチコットがプロティノスを明言するのは1回だけであるが、プロティノスに特有の「流出」の概念は、ウィッチコットの聖書講解の展開に使用されている。

The *truth of God* it admits of many distinctions; but I would only speak of truth by way of emanation. There is in divinity, a *distinction of truth* that is of main and principal concernment; that is, the distinction of truth in respect of its *emanation* from God, the father of truth; for all the truth is a ray, and a beam from God, who is the father of truth. Now God communicates himself to us two ways.

神の真理は多くの区別を許容しうる。しかし、私は流出の道による真理についてだけ語りたい。神学においては、主要かつ原理的に重要な真理の区別がある。それは真理の父である神からの流出に関する真理の区別である。なぜなら、あらゆる真理は真理の父なる神からの光線であり光熱だからである。さて、神は二つの方法で自身を私たちに伝達する⁶⁰⁾。

真理は神から流出する光線・光熱にたとえられている。このたとえの根底には、一者からアイデアが流出し、さらにアイデアから感覚物が流出するとし、流出を太陽から出る光にたとえるプロティノスの考え方があると思われる⁶¹⁾。ウィッチコットによると、真理には自然の真理と啓示の真理とがあり、それぞれが第一および第二の「流出」なのである。啓示の真理は神的な真理であり、「流出」の段階の観点からは自然の真理とは区別されるが、両者とも神から出ている点では共通である⁶²⁾。自然の真理が神からの第一の流出であるのと同様に、啓示の真理は神からの第二の流出であり、前者を適切に補充するものである⁶³⁾。

先に述べた「神に似ること」、「神に与る」ことと密接に関連するのが、ウィッチコットの「神化」(deification) という見方である。彼は、「私たちの救い主が、私たちの性質に与ることによって、私たちに生じる諸々の大いなる利益」(The Great Benefits That Accrue to Us by Our Saviour's Being in Our Nature) という聖書講解の中で、救いには神が人間に果たす役割と、人間が神に果たす役割という両面性があるとし、人間が神に果たす役割の重要性を次のように説明する。

Now, let us look for the explication of this, *in ourselves*; in our *nativity from above*; in *mental transformation*, and *deification*. Do not stumble at the use of *the word*. For, we have authority for the use of it, in scripture, 2 Pet. i. 4. *Being made partakers of the divine nature*; which is in effect our deification. Also, let it appear in our *reconciliation to God*, to *goodness, righteousness and truth*; in our *being created after God, in righteousness, and true holiness*, Eph. iv. 24.

さて、その説明を私たち自身のなかに探しましょう。私たちの上からの誕生のなかに、心の変革と神化(deification)のなかにです。この言葉の使用につまずかないでください。なぜなら、私たちは、その使用の権威を聖書のなかに、すなわち、ペトロの手紙二1章4節のなかにもっているからです。神の性質に与る者たちとされる⁶⁴⁾とは、要するに私たちの神化です。また、それは神に対する私たちの和解、すなわち、善性、正義、真理に対する私たちの和解のなかに現れなければなりません。私たちが神にかたどって創造されることの中に、正義と真の聖さのなかに現れなければなりません (『エフェソの信徒への手紙』4章24節)⁶⁵⁾。

Deification (Gk. θεώσις または θεοποίησις) は、ギリシャ教父たちのなかに顕著に表れる概念である。ウィッチコットが引用する『ペトロの手紙二』1章4節は、新約聖書において

この概念を示唆する唯一の箇所である。しかし、この箇所の第一義的関連は、聖霊によって私たちは神の子どもであるというパウロの教説（『ローマの信徒への手紙』8章）、および父・子・聖霊が信者の内に住むというヨハネの教説（『ヨハネによる福音書』14～17章）である。エイレナイオスはこの箇所にに基づき、神が受肉において私たちの生に与ったように、私たちが神的な生に与り、「神があるところのものになる」という思想を展開した⁶⁶⁾。さらに、アレクサンドリアのクレメンスは、この概念を「神に似ること」（ὁμοίωσις θεῷ）というプラトンの思想に結びつけた⁶⁷⁾。このようにして神化の思想は展開していくわけであるが、その基調はアタナシウスが言うように、「ことばは神となった……それは私たちがその御霊に与り、神化される（θεοποιηθῆναι）ためである⁶⁸⁾」という理解である。御子のなかにある神的な生に与ること、それが神化なのである。ウィッチコットが deification と言うとき、それはギリシャ教父たちからの直輸入ではない。あくまでも権威ある聖書箇所の引用なのである。ただし、「神の性質に与る者とされる」（γέννησθε θείας κοινωνοὶ φύσεως）という文言の解釈にあたっては、彼はギリシャ教父に由来する神化という用語を使う。それは、神の賜物である信仰は善行に結びついてこそ意味をもつという、彼の考えを示す上で適切な概念であるという判断によるものである。この点が、聖書解釈における聖書外の思想や概念の使用を排除する、厳格な PC と異なるところである。ウィッチコットは聖書の権威を認めながらも、解釈が必要な場合には、「信仰のみ」の立場に固執しない。反対を恐れず、あえて理性による説明を行う。その根底には、神が人間に啓示したことがらは、神の賜物である理性によって理解できるはずであるという考えがあるものと思われる。

The faith of the Lord *Jesus Christ* conjoined with our repentance and reformation, is now the only way to obtain pardon and forgiveness. ... No man will go to *Christ* for pardon, unless he be sensible of the evil of sin and of which he doth repent, and condemn himself, and resolve against it; for no true penitent doth allow himself in sin.

われわれの悔い改めおよび変革と結合した主イエス・キリストへの信仰が、今や許しと赦免を得るための唯一の道です。……人はだれも罪の邪悪さを自覚し、悔い改め、自らを弾劾し、それに対抗する決心をしないかぎり、許しを乞うためにキリストのもとへ行くことはないでしょう。なぜなら、真に悔い改める者は、自らが罪の中にとどまることを許さないからです⁶⁹⁾。

信仰が必然的にもたらす善行、これがウィッチコットの言う神化である。神の力は必ずや

人間に、大きな変革をもたらすことができるはずなのである。

5 「和解」における神と人間の相互性

ウィッチコットの以上のような思考傾向は、その「和解」(reconciliation)の理解において顕著に表れている。その特徴をとらえるためには、その対極にあるPCの和解論を見ておく必要があるだろう。ピューリタン神学は、信仰のみによる義認を説いたルターと、人間の完全な墮落を説いたカルヴァンの流れを受け継いでいる。そして、さらに義認の教説を極端に押し進め、恵みと救いは徹頭徹尾神に属し、神によって外から人間に与えられるものとした。ここに人間が自発的に善を行う可能性は排除された。そして、自分の理解を絶対とし、違う考えの人たちを迫害した。ピューリタンが描いたキリスト像は、人間の善行の可能性を否定し、人間にひたすら信仰の従順を要求し、信仰と恵みの絶対性を否定する人間に対しては、地獄の刑罰で脅す恐ろしいキリストであった。ウィッチコットに異議を唱えたタックニーの背後には、このようなキリスト理解が存在していた。彼がウィッチコットと交わした手紙から判断するなら、以下のようなになるだろう⁷⁰。すなわち、罪人の「義認」(justification)は、もっぱらキリストの贖罪の結果、外から「転嫁された」(imputed)義によって生じるものであり、元来、人間には「内在的な」(inherent)義のひとかけらもない。私たちの和解において神に影響を及ぼすものは、キリストの贖罪の働きのみであり、人間の働きはまったく無効である。この和解における人間の働きの無効性という理解は、「予定」(predestination)の教説を奉じるPCの基本的立場と呼応する。予定の教説の根底には、人間は完全に墮落しているという教条主義と、人間の贖罪は完全に神の意志によって決定されるという決定論がある。この考え方は、タックニーもその起草者の一人である、ウェストミンスター信仰告白の主張に連なる。それによると、神は永遠の昔からこれから起こることを定めている。それゆえ、神の裁断により人間と天使のある者たちは永遠の命に予め定められており、他の者たちは予め永遠の死に定められている。永遠の命に入る者の数は、永久に決定済みである。それは純粋に神の自由裁量の恵みによるものであり、人間の側の信仰や善行はまったく神の意志に関与できない。このような徹底した決定論が、PC神学の基調であるといえよう。タックニーとウィッチコットの論争は、互いに自分の立場を譲らないまま打ち切られた。その翌年、1652年7月4日、タックニーはエマニュエル学寮の卒業式で説教を行ったが、そこにはPCの立場と、プラトニズム的思考傾向に対する批判が、遺憾なく反映されている。

Salvation is only by Christ, therefore in all matters of salvation, with a single eye let us look to Christ and to God in him, as Elected in him, Redeemed by him, Justified by his grace, and the imputation of his righteousness, in which is the ground

of comfort, and sanctified by his spirit, not by a philosophical faith; or the use of right reason, or a virtuous morality, too much now-a-days admired and cried up. As old, the Temple of the Lord, the Temple of the Lord. So now, the Candle of the Lord, the Candle of the Lord. I would not have that Candle put out, I would have it snuffed and improved as a handmaid to faith, but not so (as when the Candle is set up) to shut the window, wither wholly to keep out, or in the least to darken the Sunshine, as it is with men's eyes, who can read better by a candle in the night, than by day-light ... Whatever Nature and Morality may be to others, yet to us let Christ be all in all. Nor let us to be Deists, but Christians; let us not take up in such a Religion, as a Jew, or Turk, or Pagan, in a way of Nature and Reason only may rise up unto, but let us indeed be what we are called Christians, Christians ... Not a philosophical dull Morality, but the law of the Spirit of life, which is in Christ Jesus ... not that Candle light, but the Sun of righteousness, that will guide our feet into the way of peace.

救いはキリストによってのみ与えられます。それゆえ、救いに関するすべてのことがらにおいては、純真な目でキリストを、そして彼の内にある神を見つめましょう。私たちは彼において選ばれ、彼によって贖われ、彼の恵みによって義とされ——彼の義の転嫁、そこに慰めの根拠があります——、彼の御霊によって聖とされるのですから。救いは、哲学的信仰、正しい理性の使用、徳のある道徳性というような、昨今感嘆され称賛されているものによっては与えられません。昔から、主の神殿、主の神殿と言われてきました。ところが今や、主のともしび、主のともしびと言われます。私はそのともしびが消されるのを欲しません。むしろ、その芯が切られて、信仰の侍女として改善されることを欲します。しかし、それは（ろうそくが置かれる時のように）窓を閉じ、日光を完全に閉め出したり、少なくともそれを暗くしたりするためではありません。人間の目についても同様であり、人は白昼の光によるより夜のろうそくによるほうがよく読むことができます。……他の人たちにとっては自然と道徳性がどれほどのものであろうとも、私たちにとってはキリストがすべてのすべてであるとしようではありませんか。私たちは理神論者ではなく、キリスト者であるといたしましょう。私たちは、ユダヤ人やトルコ人や異教徒のような宗教を、すなわち、自然と理性がようやく登り切ることができる程度のものを取り込まないようにいたしましょう。そうではなく、まさにキリスト者と呼ばれるのにふさわしいものであるといたしましょう。そうです、キリスト者です。哲学的な鈍い道徳性ではなく、キリスト・イエスの内にあるいのちの御霊の法則こそが……

かのともしびの光ではなく、義の太陽こそが、私たちの足を平和の道に導くでありましよう⁷¹⁾。

以上のように、救いをもつばら神の恵みと予定に限定し、人間が関与する余地を完全に排除するのが、タックニーの立場である。これに対して、ウィッチコットは神の恵みへの人間の応答という局面において、人間が関与する余地を認める。和解論の観点からいえば、神はキリストにおいて自分と人間との和解成立を宣言し、和解に応じるように人間に呼びかけている。それゆえ、人間は悔い改めと自己変革をもって和解を受け入れなければならない、ということになる。

ウィッチコットは、「キリストの死による罪人たちの和解」(The Reconciliation of Sinners by the Death of Christ) という聖書講解の中で、和解者としてのキリストについて次のような説明を与えている⁷²⁾。すなわち、キリストは、人間の罪による害を受けた神と、罪による害を神に与えた人間との間の和解者である。和解者としてのキリストは、神と人間の両者の権利を考慮する。神は権威者、および所有者としての権利をもつゆえ、人間に奉仕と負債返済を要求する権利をもつ。しかるに、人間はとうてい返済しきれない罪の負債をもつ。もし神がその権利を厳しく主張するなら、人間は永遠に滅びるしかない。しかし、幸いにも、キリストは和解者として、私たちのために神にとりなしをしてくれる。人間が満足な「償い」(satisfaction) をすることができないことは明らかだが、それでもなにかがしかのことはできる可能性がある。人間の中にある主のともしびはいかにおぼろげであろうとも、消え去ってはいない。和解者は、人間にできるわずかばかりのことを人間がするように求める。それは、人間が神を認め、悔い改め、その義務に戻ることである。人間がそれをするなら、和解者は神を憐れみへと「動かす」(move)、その権利を「取り下げ」(abate)、罪人がささげることができるわずかばかりのものを受け取ってくれるように取りはからう⁷³⁾。「彼（私たちの救い主）は、彼自身の犠牲によって、人間を赦すように神を説得します。かくして、神の名誉を守るのです」(By his own sacrifice he doth persuade God to pardon; and then he doth secure God's honour)⁷⁴⁾。神とキリストにとって、この取り計らいはけっして容易なことではない。問題処理のために、キリストが自分から進んで死へ赴き、自分を無とすることを、神はよしとした。神はキリストにおいて、神と人間との和解を成し遂げる。

神と人間との和解の過程において、キリストの十字架は決定的な位置をしめる。キリストの死は神を動かすと同時に、人間をも動かす。この点が、ウィッチコットの和解理解において重要である。人間は、キリストの死によって、神が人間との和解を申し出ていることを知り、キリストの死に動かされて、罪の放棄と義務の遂行へと邁進する。このように、ウィッチコットの理解では、和解は神と人間にとって「相互的」(mutual) であり、それゆえにこ

そ和解は両者に受け入れられるものとなる。

Thus you see the business of reconciliation is both acceptable to *God* and *man*. To God, because God's honour is maintained, and because infinite wisdom and goodness have therein exercised themselves. And to *man*, because man is put upon nothing but what is best in itself: that a man if he did but consider, he would not be saved in another way. And man now is out of danger; looks upon God as his friend: and God delights in this his product, infinite wisdom and goodness together, which is transcendent to that productive power of creating something out of nothing. This is the representation I make you concerning the *matter of reconciliation*.

かくしておわかりのように、和解のわざは神と人間の両者に受け入れられるものとなります。神にとっては、神の名誉が維持されるゆえに。また、無限の知恵と諸々の善とがその中で行使されたゆえに。そして、人間にとっては、人間が他でもなくそれ自体において最善であるものを付与されるゆえに。すなわち、もし人間が少し考えてみればわかることですが、人間は他の仕方では救われられないでしょう。そして、人間は今や危険を脱しています。神を友と見えています。神はこの自分の産物を、無限の知恵を、そして諸々の善をことごとく喜びます。それはあの無から有を創造する、かの生産力にまぎっています。これが和解の内容について、私が皆さまに申し上げたい説明なのです⁷⁵⁾。

このように和解は「相互的」(mutual) プロセスであるが、ウィッチコットにとっては、特に、人間が愛の神への応答として善行に邁進する局面が重要である。彼は、タックニーから来た最初の手紙への返信のなかで、和解における人間の責任について次のように語る。

They therefore deceive and flatter themselves extremely; who think of reconciliation with God, by means of a Saviour, acting upon God in their behalf; and not also working in or upon them, to make them God-like. Nothing is more impossible than this; as being against the nature of God: which is in perfect agreement with goodness, and has an absolute antipathy against iniquity, unrighteousness and sin. And we cannot imagine, that God by his Will and Pleasure can go against his Nature and Being.

それゆえ、次のように考える人たちは、大いに自分を欺き、自分にへつらっているのです。すなわち、神との和解は、救い主が彼らのために神に働きかけることによるものではあるが、救い主が彼らの内で、あるいは彼らに対して働きかけ、彼らを神に似る者とすることによるものではないと。そのような考えほど不可能なものはありません。それは神の本性に反するからです。神の本性は善性と完全に一致し、不正、不義、罪と完全に対立します。神が自分の意志と欲求のゆえに、自分の本性と本質に反する行動をとるなどということは、私たちには想像することができません⁷⁶⁾。

以上において見た、和解における神と人間の相互性、および人間の責任という視座から見ると、ウィッチコットのキリストは、人間を強制せず、人間の自発性を尊重する存在だということになるであろう。ここにたゞ自由な気風は、厳格な教条主義の立場から自分の宗教と道徳を民衆に押しつけ、服従しない者を厳しく処罰するピューリタン教区エリートの方と対極に立つといえよう。和解者キリストは、神と人間との和解の成立過程において、両者の自発性を尊重するのである。

There must be a voluntary submission of the party delinquent, and voluntary remission of the party offended. There must be a free forgiveness on God's part, and ingenuous submission on the sinner's part. What is forced upon us, is insignificant. If you punish a malefactor till doomsday, there is no satisfaction.

義務を怠った側の自発的な服従と、損害を受けた側の自発的な赦免がなければなりません。神の側の自由な赦しと、罪人の側の真摯な服従がなければなりません。私たちに對して強制されるものは、無意味です。あなたが犯罪者を未来永劫に処罰したとしても、償いは得られません⁷⁷⁾。

神の自発性は認めるが、人間の自発性は否定する PC に対して、ウィッチコットのキリストは、人間の自発性の復権を宣言するものであるといえよう。

Though the motion of reconciliation begins with God, yet God expects our *concurrency* and *consent*. Reconciliation is never accomplished without us, without some voluntary act of man. We cannot be happy but by that which is our own choice, for that which is not our choice, will be our burden. There is nothing of happiness where there is violence and force. That which will make us sound, must be

inwardly received and concocted; for no outward application will make a man sound. It is so in naturals and spirituals.

和解の動きは神から始まります。しかしながら、神は私たちの協働と同意を期待します。和解は、私たちの外で、人間のなんらかの自発的な行為なしに、成し遂げられることは決してありません。私たちが幸福でありうるのは、他でもなく自分自身が選択したものであるによつてです。なぜなら、私たちの選択でないものは、私たちの重荷でありましょう。暴力と強制のあるところに、幸福はまったくありません。私たちを健全にするであろうものは、内面的に受け入れられ調合されなければなりません。なぜなら、外面的な処方では人間を健全にすることがないでしょう。自然に属するものどもも、霊に属するものどもも、そのようになっています⁷⁸⁾。

ここで言及されている自発性とは、理性に抑制された意志の働きであり、放縦とは無縁である。「意志」(will)は、理性と正義を離れては無意味である。ウィッチコットによると、やりたいうようにやるという傲慢な言い方ほど有害なものはない⁷⁹⁾。自発性は、社会のあらゆる階層によつて尊重されなければならない。支配者は、暴力によつてではなく、理性に基づく議論によつて被支配者を説得しなければならない。被支配者は、処罰への恐怖によつてではなく、支配者が与える納得がいく理由説明に基づいて、自発的に服従しなければならない。

That Abraham gives reason for what he saith; therefore we should not take upon us to dictate and impose on others, but it becomes us to show cause and to satisfy men by reason and argument: and this is the direction of the apostle, who charges it upon christians, to be ready to render a reason of the hope that is in them.

アブラハムは自分が語ることに理由説明を与えています。それゆえ、私たちは他者に命令したり強制しようとしてはなりません。むしろ、原因を示し、理性と議論によつて人々を満足させるほうが、私たちにふさわしいのです。そして、これが使徒の指示することであり、彼はキリスト者たちに対して、自分のなかにある希望について理由説明できる準備ができているように命じています⁸⁰⁾。

6 明るいキリスト理解

ウィッチコットのキリストは、救いにおける神の責任と人の責任を同等に尊重するが、それは他でもなく一体としての救いを人間に提供することを意味する。「キリストによる救い

の性質」(The Nature of Salvation by Christ) という聖書講解において語られた次の言葉は、それを表している。

As I will produce ten words in Scripture that come into my mind, which it may trouble you to distinguish, and they are all belonging to the same state; they differ but notionally or gradually, or as to our apprehension only: they are these, *regeneration, conversion, adoption, vocation, sanctification, justification, reconciliation, redemption, salvation, glorification.*

私の心に浮かぶ聖書の 10 の言葉を提示いたしましょう。皆さんはそれらの区別に苦勞なさるかもしれませんが、実はそれらはみなまったく同一の状態に属しているのです。それらはただ概念において、もしくは段階において、もしくは私たちの捉え方に関してのみ異なるのです。それらは以下の言葉です。すなわち、再生、回心、養子縁組、召命、聖化、義認、和解、贖罪、救い、栄化です⁸¹⁾。

この後に、それぞれの概念についての説明が続く⁸²⁾。これら 10 の言葉は、同一の実体を示すそれぞれの局面であり、競合する別個のものではない。その観点からすると、PC の神学においてしばしば行われる、学術的な細かい区別立てはもはや不要である。ここにも、外面より実質を優先するウィッチコットの考え方が現れている。畢竟するところ、これらの言葉は協和して、救いという一つの美しい楽曲を奏でるはずのものである。

I will tell you what these words mean plainly, that everybody may understand. It is no more than to be a good, honest *christian*, i. e. to follow the plain direction of our Lord, and Saviour, to live according to his rules, and to endeavour to be in his spirit, and this is to *know Christ*, and to have *Christ formed in us*, and *to be in Christ*.

これらの言葉が何を意味するかについて、だれにでも理解できるようにわかりやすくお話ししましょう。それは、他でもなく善良で誠実なキリスト者であるということに他なりません。つまり、私たちの主人にして救済者である方のわかりやすい指示に従って行くこと、この方の規則に従って生きること、この方の精神にとどまるように努めることです。これがキリストを知るということであり、私たちの内にキリストが形成されるということであり、キリストの内にあるということ⁸³⁾です。

ここに救いの理解に関するウィッチコットの特徴が、明白に表明されている。それは統一の観点による救い理解であり、PCにおける分割の観点によるそれと対極に立つ。統一の観点とは、換言するなら、本質の観点ということである。ウィッチコットにとって救いの本質とは、要するに、「善良で誠実なキリスト者」であることに他ならない。「善良で誠実な」とあるように、救いの道徳性が重視されている。しかし、それ以上に重要なことは、「キリスト者」であることである。キリスト者であるとは、「キリストを知る⁸⁴⁾」ことである。キリストを知るとは、「私たちの内にキリストが形成される⁸⁵⁾」ことである。私たちの内にキリストが形成されるとは、「キリストの内にあるということ⁸⁶⁾」である。ウィッチコットはタックニーから、哲学に染まりすぎているという批判を受けたが、救いの本質について語る次元においては、彼はもっぱらヨハネやパウロの用語だけを使用している。神学の営みにおける哲学の有用性を認めるウィッチコットではあるが、その神学の究極の拠り所は聖書である。

救いを統合的にとらえるウィッチコットの理解は、「義認」と「聖化」の協働という理解に連結する。彼はタックニーへの手紙の中で次のように語る。

Yet I confess, I cannot marvel; to see you balance matters of knowledge, against principles of goodness; and seem to insist-on Christ, less as a principle of divine nature in us; than as a sacrifice for us. I acknowledge, they both speak the rich grace of God in Christ to man: I mean, expiation of sin, in the blood of Christ, and true participation of the divine nature, to the making of us truly Godlike or conform to God, through Christ being formed in us: and I know not well — or rather dare not, compare them: both being the provision of Heaven, to make us capable of happiness; and fundamentally necessary to our safety.

しかし、私は告白します。驚かざるをえません。あなたは知識の諸事と善性の諸原理とを比較対照しておられるのですから。あなたはキリストを、私たちの内にある神的本性の原理としてではなく、むしろ私たちのための犠牲として主張しておられるように思われます。私は認めます。これら両方が、人間へのキリストにおける神の豊かな恵みを告げるのです。つまり、キリストの血潮による罪の償いと、神の本性に真に与ることです。それらは、私たちの内にキリストが形成されることを通して、私たちを真に神に似た者、あるいは神と同様な者にしてくれます。私はそれらをよく知っていません——いやむしろ、あえてそれらを比較対照しようとしません。両者は共に天国へ行く準備であり、私たちに幸福を得させてくれるものです。そして、私たちの安全のために根本的に必要な

ものです⁸⁷⁾。

ここで語られている、「人間へのキリストにおける神の豊かな恵み」(the rich grace of God in Christ to man) という文言に着目したい。ウィッチコットは、神の裁きを強調するピューリタニズムのキリスト理解を、「神愛」(Charity) の観点から再解釈しているのである⁸⁸⁾。「私たちのための犠牲」(a sacrifice for us) という伝統的理解は、「私たちの内にある神的本性の原理」(a principle of divine nature in us) という理解に置き換えられているのは、そのためである。タックニーはこのような文言にプラトニズムの臭いをかぎつけ、危機感を覚えたわけであるが、先に見たように、ウィッチコットにとってそれは聖書の文言以外の何ものでもない。彼がこのような再解釈を行うことができた根底には、広義のプラトニズム的精神が脈打っているとしても、ウィッチコットにとって聖書解釈の権威はあくまでも聖書なのである。

ウィッチコットの聖書講解において、哲学概念の使用は最小限にとどめられており、それが使用される場合でも、聖書に対して副次的地位に服している。しかし、それは、プラトニズムがまったく彼の聖書講解に作用していないということではない。PCが風靡していた当時のイングランドは、闘争の状況の中で宗派や身分の違いを超えた普遍的に妥当する原理を必要としていた。ウィッチコットが選んだのはプラトニズムである。彼はその中に普遍的原理の可能性を見だし、それを聖書講解に適用した⁸⁹⁾。それは行動としては、PCの熱狂の嵐を静めることができなかった。しかし、カッシーラーが指摘するように、宗教思想史の観点からは、ウィッチコットの業績は評価に値する。ウィッチコットに始まるCPは、PCにとっては決着済みと思われていた、自由と必然、道徳と宗教といった決着を容易に受けつけない問題を再提出し、再検討を促した。ここに時代遅れだと思われつつあったプラトニズムが再登場し、真理追究と徹底的吟味の役割を果たすことになったのである⁹⁰⁾。

贖罪の理解において、十字架にかけられたキリストが中心の位置を占めることは、言うまでもないが、問題は、十字架のキリストがどこにいるのかということである。ウィッチコットは、PCによって人間の外に排斥されてしまった十字架のキリストを、人間の内に呼び戻し、人間の内なる十字架のキリストへ回復したと言える。彼はタックニーへの手紙の中で次のように述べている。

Now that Christ is more known and freely professed, let him be inwardly felt, and secretly understood; as a principle of divine life within us, as well as a Saviour without us (Christ is the Leaven of Heaven; sent into the world, and given to us; to leaven us into the nature of God.)

今やキリストはもっと知られており、もっと自由に告白されているのですから、さらにキリストが内側で感じられ、奥まった所で理解されるようにもいたしましょう。私たちがの内にある神のいのちの原理としてです。私たちの外にある救い主としてだけではなく、私たちが内なる恵みの原理としてです（キリストは天国のパン種です。彼は世に派遣され、私たちに与えられました。それは私たちが神の本性へと変化させていくためです）⁹¹⁾。

神の愛から遠ざけられ、貧困と差別に苦しんでいた民衆に、今や神の愛に浴する明るい未来が開かれた。「私たちの内なるキリスト」は、義認・聖化のキリストとして社会の隅々にまで、最下層にまで届く存在である。ウィッチコットの見るところでは、イギリス社会の中には、熱狂的に「信仰による義認」を唱えながら、その実、「悪意、恨み、怒り、妬み、復讐といった悪魔的性質」に堕ちている人たちが大勢いた。だからこそ、明るいキリスト像が提示される必要があった。信仰による義認と、聖化・神聖・神的本性との間の分裂を一つに統合してくれるキリスト、義認と聖化のキリストが必要であった⁹²⁾。ウィッチコットがタックニーに語った以下の言葉のなかに、そのようなキリスト理解への熱い思いが表明されている。

Christ doth not save us; by only doing for us, *without* us: yea, we come at that, which Christ hath done for us, with God; by what he doth for us, *within* us. For, in order of execution, it is, as the words are placed in the text; Repentance, before Forgiveness of sins; Christ is to be acknowledged, as a principle of grace *in* us; as well as an advocate *for* us. For the scripture holds-forth Christ to us, under a double notion; 1. to be felt in us, as the new man; in contradiction to the old man: as a divine nature; in contra-diction to the degenerate and apostate nature; and as a principle of heavenly life; contrary to the life of sin, and spirit of the world: 2. to be believed-on by us, as a sacrifice for the expiation and atonement of sin; as an advocate and means of reconciliation between God and Man. And Christ doth not dividedly perform these offices; one and not the other.

キリストが私たちが救うのは、私たちの外で、私たちのために働くことによってではありません。そうです。キリストが神と共に私たちのために働いたそのことに私たちが到達するのは、彼が私たちの内で私たちのために働いたことによってです。なぜなら、行動の順序では、聖書の言葉にあるように、悔い改めが先で、罪の赦しが後です。キリストは私たちの内なる恵みの原理として認識されなければなりません。私たちのための弁

護者としてだけでなく、です。なぜなら、聖書は、二つの意味で私たちにキリストを提示するからです。1. 私たちの内に感じられるべき、新しい人として。古い人としてではなくです。神的な本性としてです。墮落し背教した本性としてではなくです。また、天国のいのちの原理としてです。罪のいのち、およびこの世の霊としてではなくです。2. 私たちによって信頼されるべき、罪の償い・贖罪のための犠牲としてです。神と人との和解のための弁護者・手段としてです。キリストがこれらの務めを果たすのは、どちらか一方だけというような、分離した仕方によってではありません⁹³⁾。

当時の民衆の多くは、貧困のため聖書の文字を読むことができなかった。それゆえ、聖書は宗教の専門家や富裕者の独占物であった。しかし、ここに至って、文字を読むことができない人たちにも、希望の光が差し込む。ウィッチコットのキリスト理解によると、人間はだれもが、内なるキリストによって理性を照らされ、愛の神を知り、その愛に励まされて変革と向上の道を上昇していくことができるのである。

God hath set up *Two Lights*; to enlighten us in our Way; the Light of *Reason*, which is the Light of creation; and the Light of *Scripture*, which is After-Revelation from him. Let us make use of these two Lights; and suffer neither to be put out.

神は私たちの行く道を照らすために、二つの光を設けた。理性の光。これは神の創造の光である。そして、聖書の光。これは神による後の啓示 (After-Revelation) である。私たちはこれら二つの光を用いよう。どちらも消さないように努めよう⁹⁴⁾。

結 語

ウィッチコットのプラトニズムは、哲学史上の特定のプラトン哲学者に傾倒し、それに基づいて構築された知の体系というようなものではない。むしろ、歴史のなかに継承されてきた、プラトニズム的精神を尊重する姿勢ともいうべきものである。その精神には、真理を求めてやまない探求心、性急な判断を控える慎重さ、感覚界の彼方に知性界を仰ぎ見る視点、人間の理性への尊敬、真に神的な存在への畏怖などが含まれるであろう。このような精神が、ウィッチコットのものの考え方の基層を成しているものと思われる。したがって、そのプラトニズムは哲学体系というよりは、むしろ思考の型、もしくは思考の傾向ともいうべきものである。言うなれば、それは広義のプラトニズムである。

本論で見たように、ウィッチコットの聖書講解における究極の権威は、聖書である。しか

しながら、聖書の文言や神学概念が複数の解釈を許容するように思われる場合には、彼は神の賜物である理性を用いて、理性に合致する本質的な意味を探求する努力をためらわない。ここにおいて作用するのが、彼の広義のプラトニズムである。

ウィッチコットのそのような思考傾向は、「わたしたちの内なるキリスト」と「神化」の理解に表れていることを、最初に見た。PCによって人間から遠ざけられていたキリストは、「わたしたちの内なるキリスト」として、人間の内側に回復された。そもそもキリストが人性に与ったということは、人間の外にある、人間から遠くにあることがらではない。それは人間の内に起こることがらである。それによって、人間はキリストの神性に与り、キリストに似た者となるという意味での神化の可能性が開かれるのである。

このようなキリスト理解は、「和解」における神と人間の相互性という考え方に顕著に反映されている。和解はキリスト教神学の救済論における重要な教説であり、人間にとって救いの根拠たるべきものである。ところが、それはPCの予定論によって、もっぱら神の専決事項とされていた。完全に墮落した存在であると烙印された人間にとって、和解に参与する余地はまったく存在せず、それはひたすら神の意志と欲求によって決定されるものとされていた。人間を不安と諦めに引き渡すこのような決定論に、ウィッチコットは異議を唱えた。たとえ人間がどれほど墮落した存在であるとしても、神の恵みを受けて、少なくとも、罪を自覚し、悔い改め、神に立ち返るといふ小さな局面においては、人間が神の和解に協働することができる余地がある。そして、このような意味での和解は人間に救いを得させ、救われた人間はキリストにおいて示された神の愛への応答として、善行に駆り立てられる。すべての人間の内にある理性が、そのことの証しである。罪のゆえに理性がどれほど弱められ、風前のともしびであるとしても、それは神の賜物である以上けっして消し去られることはないということが、ウィッチコットの確信であった。

イングランドの民衆は、キリストの救いを必要としていた。しかし、その救いはPCによって、再生、回心、養子縁組、召命、聖化、義認、和解、贖罪、救い、栄化というふうに、術学的分割をこうむっていた。このような細かい神学上の区別立ては、貧困のゆえに文字を読むことができない人たちを救うことはできない。ウィッチコットは分割されていた救いを統合し、本来の救いへと復帰させた。本来の救いとは、キリストそのものに他ならない。そのキリストとは人間の内なるキリストである。十字架のキリストも人間の外にあるキリストではなく、人間の内なる十字架のキリストである。そのキリストは、人間の内にある神的のいのちの原理として感じられ、理解されうる存在である。

このように把握されるキリストは、人間を内側から変革し、善行に駆り立てずにはおかない。人間のはるか彼方に押しやられたPCのキリストに対して、ウィッチコットのキリストは、限りなく人間の実存に近いキリストである。陰鬱な時代における、斬新で明るいキリスト像

である。そこにプラトニズムの作用のしるしを見てとることができる。

註

- 1) [Ed.] F. L. Cross and E. A. Livingstone, *The Oxford Dictionary of the Christian Church* (Oxford University Press, 1977), 271; F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists. A Study* (J. M. Dent and Sons Ltd., 1926), ix.
- 2) R. M. Jones, *Spiritual Reformers in 16th & 17th Centuries* (Macmillan and Co., Ltd., 1914), 288. “Latitude-Men” という呼称に関しては、cf. S. P. (おそらく Simon Patrick), *A Brief Account of the New Sect of Latitude-Men* (1662).
- 3) Cf. 新井 明・鎌井 敏和共編『信仰と理性 ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』(お茶の水書房、1998年)。鎌井 敏和・泉谷 周三郎・寺中平治編著『イギリス思想の流れ 宗教・哲学・科学を中心として』(北樹出版、2001年) 第2章「ケンブリッジ・プラトン学派とその周辺」25-48。
- 4) ウィッチコットの時代におけるイングランドの正統派ピューリタニズムは、教会政治の面では長老主義の立場を、神学理解の面ではカルヴィニズムの立場をとっていた。それゆえ、神学の観点からピューリタニズムが言及される場合、ピューリタン・カルヴィニズムという用語が使用される。Cf. J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism in Seventeenth Century England* (Martinus Nijhoff/ The Hague, 1968), 42-65.
- 5) F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 18-49.
- 6) [ED.] Gerald R. Cragg, *The Cambridge Platonists* (University Press of America, 1968), 16-31.
- 7) [ED.] Gerald R. Cragg, *The Cambridge Platonists*, 7-16.
- 8) [ED.] C. Taliaferro and A. J. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality* (Paulist Press, 2004), 6-12.
- 9) [Ed.] C. A. Patrides, *The Cambridge Platonists* (Edward Arnold, 1969), 1-8.
- 10) エルンスト・カッシーラー『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』(花田圭介 監修・三井 礼子訳、工作舎、1993年) 30。
- 11) J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol. III (Cambridge University Press, 1911), 589.
- 12) ウィッチコットの生涯については、cf. J. Tulloch, *Rational Theology and Christian Philosophy in England in the Seventeenth Century*, vol.II (Elibron Classics,

- 2005), 45-116; F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 50-67; 新井 明・鎌井 敏和共編『信仰と理性 ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』25-30。彼が生まれたのは「昔からの高貴な家」とあるが、これはジェントリー階級を示唆する。彼の父は、地方地主 (squire) だったらしい。Cf. J. Tulloch, *Rational Theology and Christian Philosophy*, vol.II, 47.
- 13) J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol. III, 532.
 - 14) P. S. Seaver, *The Puritan Lectureships The Politics of Religious Dissent 1560-1662* (Stanford University Press, 1970), 5.
 - 15) J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol. III, 589-590.
 - 16) J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol. III, 590.
 - 17) Cf. [Ed.] Samuel Salter, *Eight Letters of Dr. Antony Tuckney and Dr. Benjamin Whichcote. Appended to the Moral and Religious Aphorisms by Benjamin Whichcote* (London, Printed for J. Payne, 1753).
 - 18) Gilbert Burnett, *History of His Own Time*, edited by Dean Swift et al., 2nd ed. (Oxford, 1833), 321; J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 204.
 - 19) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists. A Brief Introduction with Eight Letters of Dr. Anthony Tuckney and Dr. Benjamin Whichcote* (University Press of America, 2005), 92; J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 204.
 - 20) “Reflections,” “Sloane,”(MS), 2716.4; J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 204.
 - 21) J. Brown, *Puritan Preaching in England. A Study of Past and Present* (Wipf and Stock Publishers, 2001), 127-128.
 - 22) J. A. Passmore, *Ralph Cudworth An Interpretation* (Cambridge University Press, 1951), 7.
 - 23) P. M. Davenport, *Moral Divinity with a Tincture of Christ? An Interpretation of the Theology of Benjamin Whichcote, Founder of Cambridge Platonism* (Doctoral Dissertation, Nijmegen 1972), 133.
 - 24) カッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス』26。
 - 25) カッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス』53-54。下線は筆者。
 - 26) 本論文 2.1。
 - 27) *Moral and Religious Aphorisms*, §742。下線は筆者。
 - 28) 『ローマの信徒への手紙』8.10-11; 『ガラテヤの信徒への手紙』2.20。
 - 29) 『ヨハネによる福音書』1.1,4; 7.38-39; 15.26; 16.7。

- 30) [ED.] C. Taliaferro and A. J. Teply, *Cambridge Platonist Spirituality*, 10.
- 31) *Moral and Religious Aphorisms*, §1157.
- 32) *Moral and Religious Aphorisms*, §355.
- 33) *Moral and Religious Aphorisms*, §625. 下線は筆者。
- 34) *The Works*, II, 82. 下線は筆者。
- 35) B. Willey, *The English Moralists*, 182-183. 下線は筆者。
- 36) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 84.
- 37) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 87.
- 38) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 91-92.
- 39) *The Works* II, 160. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 205.
- 40) J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 205-206.
- 41) *The Works*, IV, 189.
- 42) *The Works*, II, 244, 247.
- 43) J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 132.
- 44) *The Works*, II, 248.
- 45) *The Works*, I, 255-6.
- 46) *The Works*, IV, 188-189.
- 47) *The Works*, I, 255.
- 48) *The Works*, II, 244-247.
- 49) *Moral and Religious Aphorisms*, §591.
- 50) 『テアイテトス』176B. 同じ考え方は、『パイドン』64Aにも見られる。
- 51) 『国家』613A.
- 52) [Ed.] C. A. Patrides, *The Cambridge Platonists*, 19-23. ウィッチコットが言う「プラトニストたち」は、新プラトン主義およびそれ以後の同様な潮流を含んでいる。彼が属するのは、特定の哲学学派にではなく、プラトニズムとキリスト教が並行して進展した潮流にである。中世で言うと、これには、アウグスティヌス、ニュッサのグレゴリオス、偽ディオニュシオス、エリウゲナ、アンセルムス、ニコラウス・クザーヌスらが含まれる。また、イタリアルネサンス期では、フィチーノを代表とする、フィレンツェで栄えたプラトン・アカデミーの教説がその潮流に含まれる。Cf. J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 23-30.
- 53) *The Works*, I, 251.
- 54) *The Works*, I, 233. 下線は筆者。
- 55) *The Works*, II, 177.

- 56) J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 18-19.
- 57) J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 19.
- 58) *The Works*, III, 167. 下線は筆者。
- 59) B. Willey, *The Seventeenth-Century Background*, 172.
- 60) *The Works*, III, 120. 下線は筆者。
- 61) プロティノス『エンネアデス』V. 3. 12. 40-47。
- 62) *The Works*, III, 20.
- 63) *The Works*, III, 121-123.
- 64) ギリシャ語原文では、γέννησθε θεία κοινωνοὶ φύσεως.
- 65) *The Works*, IV, 188. 下線は筆者。
- 66) 『異端論駁』(*Adversus Haereses*) 5, praef.
- 67) 『教師』(*Paedagogus*) 3. 1。
- 68) 『ニカイア公会議の決議に関する手紙』(*Epistla De Decretis Nicaeae Synodi*), 14.
- 69) *The Works*, I, 261-2. 下線は筆者。
- 70) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 72-156. Cf. J. D. Roberts, 42-65.
- 71) A. Tuckney, *None But Christ* (Cambridge, England, 1654), 50-51. Cf. J. D. Roberts, 65. n. 2. 下線は筆者。
- 72) *The Work*, II, 263-273.
- 73) *The Works*, II, 267, 269.
- 74) *The Works*, II, 268. 下線は筆者。
- 75) *The Works*, II, 275. 下線は筆者。
- 76) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 79. 下線は筆者。
- 77) *The Works*, II, 268. 下線は筆者。
- 78) *The Works*, II, 340-341. 下線は筆者。
- 79) *The Works*, I, 253.
- 80) *The Works*, I, 271. 下線は筆者。
- 81) *The Works*, II, 80. 下線は筆者。
- 82) *The Works*, II, 80-82.
- 83) *The Works*, II, 82.
- 84) 『ヨハネによる福音書』14.7, 9, 17.3; 『コリントの信徒への手紙 二』2.14; 『フィリピの信徒への手紙』3.10。
- 85) 『ガラテヤの信徒への手紙』4.19。
- 86) 『ヨハネによる福音書』14.20, 17.21; 『ヨハネの手紙一』2.5, 6; 『ローマの信徒への

手紙』6.11, 8.1, 9.1; 『コリントの信徒への手紙二』3.14, 5.17; 『ガラテヤの信徒への手紙』2.4, 3.14, 26, 28。

- 87) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 146. 下線は筆者。
- 88) P. M. Davenport, *Moral Divinity with a Tincture of Christ?*, 139.
- 89) B. Willey, *The Seventeenth-Century Background*, 123-4, 182-183.
- 90) カッシーラー 『英国のプラトン・ルネッサンス』122。
- 91) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 147. 下線は筆者。
- 92) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 147.
- 93) [Ed.] T. E. Jones, *The Cambridge Platonists*, 78-79. 下線は筆者。
- 94) *Moral and Religious Aphorisms*, §109. 下線は筆者。

Benjamin Whichcote, the Forefather of the Cambridge Platonists: His platonism and his understanding of Christ

MIKAMI Akira

Abstract

This article purports to clarify how the platonism of Whichcote acts upon his understanding of Christ.

His platonism is not so much something like an intellectual system built upon Platonic philosophers in the past, as an attitude of respect towards the Platonic spirit which has been transmitted in the history. This will include an inquisitiveness to incessantly seek after truth, a cautiousness to refrain from a hurried judgement, a viewpoint to look up to the invisibles beyond the visible, an esteem to reason in man, and a reverence to the truly divine. Therefore the platonism of Whichcote is a type or a tendency of thinking rather than a philosophical system. It might be called a Platonism in the broad sense.

In his exposition of biblical texts, the Bible is the ultimate authority. However, when some biblical passages or theological concepts seem to allow multiple interpretations, he does not hesitate to endeavor to inquire an essential meaning which will accord with reason. Herein is working his platonism in the broad sense.

Such a tendency of his thinking shows itself in his understanding of Christ in terms of 'Christ in us' and 'deification'. This means that the Christ who had been shut away from man by Puritan Calvinism was recovered as 'Christ in us' into the inner part of man. That Christ partook of human nature is not the matter outside of, and far away from man. It happens in man, enables man to partake of the divine nature of Christ, and opens up the possibility of man's deification in the sense of becoming God-like.

The same tendency of Whichcote's thinking is particularly reflected in his view of the mutuality of God and man in the work of reconciliation. It goes without saying that 'reconciliation' occupies a crucial place in the Christian soteriology, and is the

ground and basis of salvation for man. However, it had been made by Puritan Calvinism the matter of the absolute despotism belonging to God. There was no room for a participation in it on the part of man who had been branded as totally depraved. Reconciliation was exclusively given up to the will and desire of God. Against this kind of determinism which would deliver man up to anxiety and resignation Whichcote threw an objection. True, man's depravity may be irrevocably grave, but, at least, in a tiny portion where man, by the grace of God, recognizes his sin, repents and comes back to God, there might be a room for a cooperation with God in reconciliation. The reconciliation in this sense will save man, and the saved man, in turn, will be driven to do good works in response to the love of God revealed in Christ. The proof of this is the existence of reason in man. Even though reason is fatally weakened by sin, and appears to be on the brink of dying away, it is never put out, as far as it is the gift of God to man. This was the conviction of Whichcote.

The people of England was in a deadly need of salvation. But that salvation had been suffered a pedantic deviation by Puritan Calvinism into regeneration, conversion, adoption, calling, sanctification, justification, reconciliation, redemption, salvation, and glorification. Such a detailed theological distinction will not be able to save the common people who was illiterate due to poverty. It is Whichcote who united the divided salvation and recovered its original state, which is nothing but Christ Himself. This Christ is the one in us. Also, the crucified Christ is not the one outside us, but the one within us. This Christ is the one felt and understood as a principle of life in us.

Thus comprehended, Christ will inevitably reform us from within and cannot but drive us to do good works. In distinction from the Christ of Puritan Calvinism who was cast far away from man to a remote place, the Christ of Whichcote is present in a closest proximity to human existence. This is a sort of new and bright image of Christ in an old and dark age. Herein is seen a token of the working of Whichcote's platonism.